東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

第九の力

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金城, 厚, Kaneshiro, Atsumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1432

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

エッセイ

第九の力

金城 厚

１　〝おおぜい〟で歌う「第九」

ベートーヴェンの《交響曲第九番》をテーマとするこの共同研究のなかで、私は自分の担当回に「日本人は〝おおぜい〟で一緒に歌うことに大きな喜びを感じる」という命題を掲げて、民俗音楽の事例を紹介した。日本人は虫の声や「水琴窟」の趣味に代表されるように、微かな音に情緒を感じるようなデリケートな音感覚を持っているが、同時に、〝おおぜい〟で声を合わせて歌うことも好きである。

私の住む沖縄県には琉球王国以来の独自の伝統文化があり、その代表が三線音楽であるが、毎年３月４日は語呂合わせで「さんしんの日」とされている。これは 1993 年に、県内民放ラジオ局であるＲＢＣ放送の名物ＭＣ、上原直彦氏が提唱して始まったイベントで、毎年この日は、同局の放送を聴いている人々が皆、正午の時報を合図に、三線を一斉に弾いて《かぎやで風節（かじゃでぃふうぶし）》を歌う、という趣向である。生放送の主会場には千人近い参加者が三線を手に集まり、また、さまざまな場所とも中継をつないで、おそらく数千人が一斉に《かじゃでぃ風節》を弾き歌うのである。近年は海外とも電話やネット回線でつないで同時演奏を試みている。

そこには熟練した三線演奏家も居れば、楽器をたまにしか触ったことのない人、最近習い始めたばかりの人も居る。皆、ラジオ放送といっしょに、沖縄じゅうの仲間たちと、そして地球の反対側のブラジル（沖縄からの移民が多い）などの人々とも同時に、数千人、あるいは数万人の仲間といっしょになって、三線を（同じ曲を）弾くのが嬉しいらしい‥‥などと外野の感想のようなことを言うと、沖縄では叱られる。たぶん。

私は「第九」のシンポジウムに参加しながら、この「さんしんの日」の光景を思い出した。日本人全体にとっての「第九」も、似たようなところがあるのではないかと。

もちろん、ベートーヴェンの《交響曲第九番》自体は交響曲という優れて純粋な音楽形式であり、演奏には高い技量が求められ、オーケストラも独唱者も合唱者もこの高度な難曲をいかに表現するかに腐心している。しかし、合唱はかなり多くの演奏者を必要とするので、自然の成り行きとして、鍛えられた専門的声楽家だけでない、アマチュアの合唱団員を加えることも多くなる。ここに、交響曲には不似合い？な素人音楽愛好家が関与する

余地が生まれてくる。

周知のように、「第九」の歌詞は人々の連帯を讃え、呼びかける意味を含んでいるので、〝おおぜい〟で声を合わせて歌うこと自体が「第九」の理念を体現しているかのような気分にさせてくれる。この点に、多くの素人合唱愛好者が演奏参加への憧れと参加した満足感を抱くのではないかと思う。

ところで、その〝おおぜい〟を極端に強調したイベントがある。大阪と東京における１万人、および５千人を集めた「第九」の試みが、何と 30 年余りも継続している。この催しは日本の音楽文化にとってどういう意味があるのか、少し考えて見たい。

なお、新型コロナ蔓延防止の措置等のもと、フィールドワークも憚られるなか、情報収集をウェブに頼らざるを得なかったので、両地の事例については、公開された表面的な情報だけに基づいた随想にとどまることをお断りしたい。

２　大阪が歌う「第九」

大阪市の大阪城ホールで、１万人を集めた「第九」の演奏会が毎年 12 月に行われている。1983 年、大阪城築城 400 年の記念イベントとして、また大阪城ホールのこけら落としとして始められた。当初は単発興行のつもりだったというが、初回の成功を受けて、毎年の開催に発展した（実際は、当初の数年間の参加者は６～７割だったらしいが、その後は、抽選をするほどに盛況のようだ）。

１万人も集めて「第九」を歌おうというこの企画は、そもそもは関西財界と経産省が連携して大阪の都市活性化のプランを模索するなかで生み出され、東京中心ではなく大阪からも文化を発信したい、という動機に発しているという。この企画が実現するにあたっては、当時サントリーの社長だった佐治敬三氏のクラシック音楽に対する意欲が強く反映したと言われる。そのため、当初８年間ほどは演奏会名に商品名が冠せられ、その後も企業ブランド名が使われるなど、スポンサー色が強いことがこの「第九」の特徴となっている。

この「１万人の第九」の主催者は、近畿地方をエリアとする毎日放送（ＭＢＳ）である。同社に「１万人の第九」の事務局が置かれ、チケット販売を含むマネジメントの元締めとなっている。さらに、毎日放送は練習の模様から本番に至るまでを毎年番組にしており、コンテンツとして使用している。そのためでもあろうか、毎回、「第九」に付随するプログラムに、ピアノやヴァイオリンの高名なソリストの客演を加えたり、タレントやポップ歌手をゲストに招くなど、大衆的なイベント色が鮮明なことが特色となっている。

2020 年の 12 月に予定されていた「１万人の第九」は、新型コロナの蔓延により開催が危ぶまれていたが、大阪城ホールは無観客とし、オーケストラとごく少数の合唱者のみで演奏する一方、テレビとインターネットを使った画面合成技術を駆使して〝おおぜい〟の参加者の事前投稿動画や当日の参加映像を合成し、毎日放送のテレビ画面上で１万人を越える合唱が実現された。まさに、電波を持つ放送局の面目躍如であった。私には、沖縄のＲＢＣラジオによる「さんしんの日」に似た状況のように感じられた。

３　東京・下町が歌う「第九」

一方、大阪で「１万人の第九」が行われて２年後の 1985 年、東京都墨田区でも５千人を集めた「第九」が始まった。こちらは、両国の国技館を会場としている。大相撲の殿堂である国技館は 1985 年１月に開館したが、その直後の２月に開館を祝うこけら落とし公演として企画されたのが、５千人の合唱団を集めて行う「第１回国技館 5000 人の第九コンサート」の公演であった。

この公演の主催者「国技館すみだ第九を歌う会」は、墨田区の地域興しと文化向上を目的として、区の観光協会が呼びかけて作られた。同会の事務局は墨田区役所内に置かれ、チケット販売を含むマネジメントを行っている。「第１回‥‥」と銘打って開催されたことにも現れているように、当初から毎年の継続を目指していた。すなわち「第九」のもつ力で地域を変えていこうという戦略が最初からあった、と言うべきだろう。

「5000 人の第九」は、地方自治体の文化政策として実施されている点が、大阪との大きな差異を生んでいる。もちろん、国技館そのものは日本相撲協会の建物で、区とは無関係だが、東京の下町地域でこれほど収容能力の大きな会場をかかえている区は他にない。これを墨田区内の貴重な財産として地域活性化に向けて活用しようとしたのも頷ける。

墨田区は、国技館の落成祝賀イベントに「第九」の公演を行って大成功だったことから触発されて、1988 年、「墨田文化都市構想」を策定するに至った。そして、同構想に基づいて、墨田区は「すみだトリフォニーホール」（1997 年開館）を建設し、そこが「第九」で縁のあった新日本フィルハーモニー交響楽団のフランチャイズとなった。オーケストラと地域との結びつきの新しい在り方である。地域との結びつきを重視した取り組みは、他のオーケストラにも増えて来ているが、ホール建設とタイアップした連携協定という在り方が興味深い。

この流れは、「第九」という魅力ある音楽イベントが音楽のもつ力を行政に思い至らせ

た結果と言えよう。そこから墨田区は、コンセプト（墨田音楽都市構想）→ソフト（オーケストラ提携）とハード（ホール）→アウトリーチの展開→文化政策の明確化（墨田区文化芸術振興基本条例）というように、音楽による地域作りを展開させて行くのである。

つまり、国技館の「第九」のインパクトが自治体の行政を動かし、地域文化を創り上げる原動力となったと考えられる。もし、これが他の楽曲だったら――、例えばベートーヴェンでも《交響曲第五番》だったら、あるいはハイドンのオラトリオ《天地創造》だったら、多くの人々を集めることも、お役人にインパクトを与えることもできなかっただろう。

しかし、「第九」には人が集まる。素人が憧れる。その質、量ともに強い思いが「第九」にはなぜか有る。その強い思いが、区役所の役人をして、音楽による地域作りを発想させたのであり、〝第九の力〟だと言えよう。

ただ、残念なことに、2020 年２月に予定されていた「国技館 5000 人の第九コンサート」は、コロナ禍のもとで他のほとんどの演奏会がそうであったように、中止のやむなきに至り、2021 年２月の予定も取りやめになってしまった。放送局が事実上主催している大阪の「第九」とは異なり、墨田区は代替手段を持っていないので、致し方あるまい。2022 年春こそは、コロナ禍からの復活を謳う「第九」が聴けるだろうか。

４　第九の力

ふたつの「第九」には共通する点がある。〝おおぜい〟の人々が集まる大規模会場のこけら落とし公演が契機となっていること、合唱参加者には多くの常連が居て、毎年のように参加して歌うことを楽しみにしていること、合唱参加者が会場所在地の周辺だけでなく、全国な広がりをもっていることなどである。

しかし、違いも多い。音楽を地域興しに繋げるという趣旨は大阪も墨田も変わらないが、志向する方向が異なる。大阪は企業メセナの傾向が強くあり、関西全体への経済的効果を期待しているように思える。墨田は行政主導の傾向が強くあり、文化による地域作りを生み出している。また、大阪は芸術興行として洗練されており、タレントを呼ぶなど、毎回の目玉作りに注目が集まっている。墨田は地元志向が強く、オーケストラ（新日本フィルハーモニー交響楽団）との関係も安定している。

西洋音楽であれ、東洋音楽であれ、音楽そのものに味わいを求めている筆者としては、ウェブ上での関係資料を探したときに、両方のイベントともに、音楽を「聴かせる」「聴いて貰う」「聴いてください」というフレーズがなかなか見られなかったことが少し不満で

ある。

考えて見れば、〝おおぜい〟で歌う「第九」イベントは、そもそも鑑賞のための舞台ではないように思う。耳を傾けて聴くよりも、合唱に参加して歌うことに意義がある。しかも、〝おおぜい〟でいっしょに歌うことに大きな喜びがあり、その結果として、多くの「仲間」とつながることが何よりも大きな意義とされているように感じる。

と書くと、筆者は〝おおぜい〟で歌う「第九」イベントを冷ややかに眺めているように読まれるかも知れないが、実は、私自身もアマチュア合唱団あがりで、「第九」の合唱に加わって歌うことに憧れていた時期もあったので（近年はすっかりアジアの歌声ばかり気になっているが）、大阪や墨田の合唱団の人々の気持ちには共感するところが大きい。

「第九」のイベントを合唱に参加するアマチュアの人々の音楽体験に着目すれば、「第九」の音楽体験は、他の音楽にはない、あるいは稀な、人々を動かす力があるのではないだろうか。それは、ベートーヴェンが選択した歌詞のメッセージによる力、また、歌詞とも連関しているが、音楽そのものの構成と響きの力――ここまでは作品自体がもつ力であるが――、そして、その演奏の体現のために人々が集まるという社会的な力、それらの全体が「第九の力」を生み出し、さらなる社会的感動を作りだしているのではないだろうか。

その力を上手く経済浮揚や地域活性化につなげようとしたのが大阪や墨田区の取り組みだと考える。「第九の力」をこれからもどう生かして行くかが、日本の西洋クラシック音楽の課題のひとつではないかと思う。

（本学教授　付属民族音楽研究所）